

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和3年12月1日（水）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 13階B・C・D会議室
- 対応：更田委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから12月1日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問のほうをお願いいたします。質問のある方は手を挙げてください。よろしいですか。フジオカさん。

○記者 NHKのフジオカです。

定例会の議題に関連して伺いたいんですけども、東海第二発電所の特重施設の関係で、今日、審査書の案を取りまとめられていました。

委員長、会合の中の言及で空冷式の事故対処の設備も付いているということもあって、BWRならではの対策も取られているという旨のことをおっしゃっていましたが。改めて今回の東海第二の特重施設について、審査をどのようなポイントで見られたかということをお伺いしてもいいですか。

○更田委員長 そうですね。一つは最終的な熱の逃し場を大気とする循環冷却設備を付けたというこのポイントで、それによって利点としていうと最終的に格納容器ベントをせざるを得ないような状況になったとしても、そのタイミングを遅らせることができる。

これには、その前の前提があって、海水を最終的な熱の逃し場とする機能が失われた場合でもという条件がつくのですけれども、そういった意味で、様々な事故の進展を考慮しても、早い時点でベントを開けなければならないような状況を、現時点で可能な限り回避することができたというところがポイントだと思っています。

○記者 環境中に放射性物質を放出するかもしれないという観点からいくと、例えば、ほかのBWRでもSAに入ってきたような代替循環冷却系とか、いわゆる冷却系の設備を特重側のほうでも積みましたというか、そういうようなイメージを持っているんですけど、そこについてはどのようなお考えですか。

○更田委員長 そうですね。ただ、ファイナルヒートシンク、最終的な熱の逃し場は空冷にしたというのが一つのポイントと。それから、配置の問題もあります。特定重大事故等対処施設は航空機衝突にも備えているので、配置上の工夫というのもあります。

それから、フィルタードベントを使わざるを得ない。フィルタードベントってほぼ静的な機器ですので信頼性は極めて高いと言えるんですけども。ただ、早い時点で開けると、まだ希ガスの減衰がそれほど進んでいません。

フィルターはセシウムなどの、いわゆるエアロゾルのほとんどを取り除くことができる。それから、ヨウ素もヨウ素フィルターで除くことができる。ただ、クリプトン、キセノンといった放射性の希ガスはどうしてもフィルターで除くことができない。ですから、希ガスの影響を考えるのであれば、できるだけベントのタイミングを遅らせたというのが指向です。

そういった意味で、海水冷却系に加えて空冷冷却でもって格納容器の雰囲気温度を下げる、圧力を下げるという機能を持たせることによって、先ほど申し上げたようにベントのタイミングに対して有利な条件を得たというのが特徴だと思います。

○記者 ありがとうございます。

最後に関連してなんですけど、こうした格納容器を空冷で冷却する仕組みというのを特重施設側に付け加えるという発想でいくと、東海第二がオリジナルになるのか、あるいは他のプラントでもこうしたところを見ていくべきというふうにお考えか、どのようなところがございますか。

○更田委員長 これは、様々なプラントのタイプであるとか、サイトの特性に合わせて事業者がそれぞれオリジナリティがあっても、むしろオリジナリティが推奨されるべきだと思っています。ですから、一つのところがこういった設計にしたからといって、必ずしも他のBWRの特重もこういう形でなければならないというものではありません。

○司会 ほかに御質問ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

—了—